

平成28年度第2回四街道市みんなで地域づくり推進委員会 議事録

日時 平成29年1月26日(木) 9時～

会場 市役所三階第二委員会室

出席委員：6名(庄嶋委員長、金子委員、伊佐委員、中山委員、田中委員、中村委員)

欠席委員：0名

事務局：岩林シティセールス推進課長

みんなで地域づくり推進グループ黒岩リーダー

みんなで地域づくり推進グループ齋藤主査補

特定非営利活動法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ勝又副代表理事

1 開会 【別紙：『みんなで地域づくり推進委員会進行』参照】

2 委員長挨拶

庄嶋委員長：挨拶の前に事務的な確認を先にさせていただきます。今後、毎度のことになると思いますが会議録の取り扱いと傍聴の取り扱い、会議の公開についての取り扱いです。会議録については発言者名を付ける形で前回も行いましたが、四街道市には「審議会等の会議の公開に関する指針の解釈要運用基準」の規定というのがありまして、原則発言者名を明記するというようになっておりますので、本日の会議についても発言者名を載せた形で議事録を作るということで確認させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(はい。)

庄嶋委員長：ありがとうございます。それから今日、傍聴の方はいらっしゃいますか。

(今のところおりません。)

庄嶋委員長：はい。今後いらっしゃるかもしれませんが、会議の公開についても基本的には議事内容について支障がなければ公開することとなっており、本日の内容も公開ということになります。配布資料に関しましては後に出てきます「コラボ四街道」の審査の関係があります。我々はプレゼンテーション当日もこちらの詳しい資料を持っているのですが、個人情報等が載っているということもあって、会場にいらっしゃる方々にはこれをダイジェストしたものを配るという形で行っていますので、今日仮に傍聴にいらっしゃ

ったとしても、こちらの詳しいものが載っている資料はお配りしないということを確認させて頂きたいと思います。よろしいでしょうか。

(はい。)

庄嶋委員長：ありがとうございます。ではそのような形で確認させて頂きましたので、これから内容に入りたいと思います。最初に少々ご挨拶をさせていただきます。

皆さん改めまして、おはようございます。新年最初の会議ということで、今年一年間またよろしくお願ひしたいと思います。今日は四街道に来ているのですが、昨日は同じ千葉県の我孫子で仕事をしていまして、今日の午後は習志野に行く予定です。千葉県中をあまり長距離移動ではないですけど行き来しております。四街道市には以前任期付職員という身分に関わらせて頂いたおかげもありまして、千葉県内のいろいろな自治体の職員さん達と知り合ったり、市民の方達と知り合ったりした関係で千葉県内でいろいろとお仕事をさせて頂いています。千葉県はいろいろな地域がありまして、非常に面白いなと思っているところです。最近はお出張で全国いろいろな所に行くのですが、特に遠くの場合は前泊か後泊を必ずして、仕事プラスちょっとその土地の良いところを見て回るということをやっております。これは日帰りできる近場に関しても大体そうでした、時間があれば、特に初めて行く所は、必ず前乗りをして街中を巡ったりしております。本当にいろいろな土地の特徴というのがありまして、街中を見ているといろいろな団体さん、市民の皆さんの手のかかった場所とかそういうものが散見されて、地域づくりということにどの街も取り組まれているな、ということを感じている次第です。四街道は本当に非常に素晴らしい賞を取られた団体もありますし、市民活動のトップランナーとして活躍されている団体が多いと思っておりますので、今後とも頑張ってもらえればと思っております。

### 3 議事

庄嶋委員長：それではこれから平成28年度第2回四街道市みんなで地域づくり推進委員会の内容・議事の方を進めさせていただきます。それでは本日3つの議題がありますので順次事務局の説明を聴きながら進めていきたいと思ひます。まず1番目の、平成28年度の6月から12月期の地域づくりコーディネーター業務報告についてご説明をお願いします。

議題(1) 平成28年度(6～12月期)地域づくりコーディネーター業務報告について  
【別紙資料NO.1『平成28年度 みんなで地域づくりセンター業務スケジュール』参照】

事務局(勝又副代表理事)：「みんなで地域づくりセンター」の勝又です。今年もよろしくお願ひいたします。ご報告いたします。資料NO.1に基づいてかいつまんでお話しさせて頂

きます。1 ページの「みんなで地域づくりセンター業務スケジュール」を参照しながら今までの流れについてお話したいと思います。表の一番上は「みんなで地域づくりセンター」で行う業務の柱を書いたものです。一番左の「地域課題への取り組みのプロデュース」「地域づくりを担う主体のネットワーク」のところでは、今年テーマとしている一番左の「地域の高齢化の課題」について主に自治会情報交換会等を中心にして地域づくりのサポート活動をしていくということで、5月に自治会情報交換会を行いまして、地域の中の居場所やサロンの方に発表をして頂いて情報交換会を行いました。そして、後程もう少し詳しくお話をしますが1月30日に拡大自治会情報交換会を開催いたします。そこでは皆さんと高齢化の課題ということに関して意見交換をする場を持ちたいと思います。

次の「地域包括ケア」は、地域の支援体制づくり研究会、「みんなで地域づくりセンター」のコーディネーターも参加させて頂いて10月に協議会が立ち上がり、引き続きここにコーディネーターが参加しながら高齢者支援課それから包括支援センター、社協等と協力する中で進めていきたいと思っております。

次の「子どもをめぐる環境」では、社会的にも子どもの貧困や孤立化などいろいろな課題が言われている中、実際に四街道の中では状況がどうなのかというのがなかなか掴めない状況にありまして、ヒアリングなどを行い、その中でも市の家庭支援課のお話を伺ったりしています。ヒアリングの報告や家庭支援課の報告をもとに、子ども支援団体交流会ということで、子どもを取り巻く状況と支援について、12月10日に地域づくりサロンを開いております。

それから次に「魅力発信や地域活性化サポートするプロジェクト」で、これまで「みんなで地域づくりセンター」の行った活動の中で立ち上がってきました「マップ活用交流会」とか「よつグルメ研究会」、「こども記者クラブ」、「日替わりシェフの店さくらそう」等の活動をサポートしながらこれらの活動を進めてきました。新しいところでは8月に吉岡の「こどもまちづくりプロジェクト」というのが立ち上がりまして、これも市活性化補助金などを使う事業ということで「みんなで地域づくりセンター」も積極的にサポートさせて頂きました。

次に、多様な人や団体が地域づくりに関わるということで、これまでも行ってきました「大きなテーブル」を6月24日・25日に開きました。これは、福祉作業所の紹介、製品の販売などを市民の方にも来て頂いて交流をするというものです。そして、そのテーマと重なります「ちばユニバーサル農業フェスタ」を12月4日に開催しております。また、たくさんの方にボランティア活動・市民活動を知って頂くということで、夏休みには「夏休み小学生ボランティア体験」を開いています。8月を中心に行い、今年も延べ154人の小学生が参加しました。また、秋の9月から11月にかけては、地域づくり体験「コラボラ」というのを開いていまして、これも市民の方が市民活動を体験して、できれば継続して参加して頂きたいということを開いております。

次に、これらの地域づくりを進めるための各種講習会・企画などについてです。今日も

議題になります「コラボ四街道」の提案に繋げるということで、コラボ塾を6月から継続して6月・7月・9月・10月に開いております。その中では決算書の書き方を学ぼうとか、それから実際にもう事業を行った団体の成果発表会を聴こうということも含めて行っていて、この先になりますが2月16日には2月23日の公開プレゼンに向けて、プレゼンの練習会をしようということを計画しております。せっかく良い企画があるのにプレゼンが慣れていないという団体もありますので、そういう練習の場を持ちたいと思っております。それから団体の運営が上手くいくように何か講座が持てないものかということで昨年始まりましたのが、組織マネジメント勉強会という、マネジメントの冊子を読み合わせながら自分の団体の運営について話し合うというもので、6月から3月まで年間を通して開いております。参加は毎回5名前後なのですが、30代から40代の若いママさんとか子育てに関わる団体の方等が参加していて、そういう情報交換の場にもなっています。

「情報の収集、把握、発信」のところでは、今年度みんなでリニューアルをしようということで、今日の資料でお配りしました9号と10号のように、A4の4ページで自治会の回覧にも載せることでたくさんの方に見て頂こうという風にしました。フェイスブック等もタイムリーな情報を載せて行こうということで、今年フェイスブックを見て頂いている方の「いいね」を500にしようということを目指し、7月までに500人の方に「いいね」を押して頂くことができました。

新しいこととして「みんなで地域づくりセンター」の「インターンシップ」があります。「みんなで地域づくりセンター」の業務を大学生等に体験して頂こうということで、これまでも計画をして昨年も広報したのですがなかなか集まりませんでした。今年は、大学生の夏休み前にボランティア情報サイトの「アクティボ」に掲載したことで8人の方にインターンシップに参加して頂きました。また、次年度に向けてはさらにやり方を工夫して進めていきたいと思っております。

大体の流れはこういう事となっております。あとは、資料NO. 1の17ページのところに12月の報告があります。ここが報告の中では最新で、今の状況を書いていますので、これについてお話しいたします。先程お話ししました高齢化の課題ということでは、1月30日に拡大自治会情報交換会があるということが載っています。地域の自治会の運営について情報交換するということから始まったのですが、地域の課題は自治会だけでは解決できないので、民生委員の方等にもこれまでにも呼びかけをしております。今回も自治会長さんはじめ、民生委員とか一般にも参加募集をしまして、現在のところ70人を超す方にお申し込みを頂いております。ここでは、情報交換だけでなく、全国で小規模地域での課題を地域で解決しよう、ということに関わっていらっしゃる川北秀人さんのお話を伺って、そのあと質問とかをしようということで、今日の資料の黄色いチラシで入れさせて頂いています。5年先、10年先に向けて今始めるべきことということでお話を伺って、これからそういう地域での話し合いなどを進めて行くときの一つのヒントにしようという

風に思っております。

次に「子どもをめぐる環境」のところでは、先程お話ししましたように12月10日に健康子ども部家庭支援課の川島さんにお話頂き、生活困窮者支援事業などを行っている暮らしサポートセンター「みらい」の及川さんにもおいで頂いて、市内の一人親家庭の状況ですとか、生活困窮者のところに寄せられる引きこもりの方のことなども少しお話を伺いました。そこでは26名の方が参加して情報交換したのですが、2時間しか時間がとれず、更にもう少し深く話をしたいということで2月8日にもう一度開催をいたします。そちらも一般の方も参加して頂いて結構です。それについて先程、当日資料としてご案内の文章をお配りさせて頂きました。

次の18ページのところでは、先程言いました様々な団体のサポートということで、例えば「マップ活用交流会」の「i c o b a」さんの活動との関連ですとか、千葉市が発行する四街道・千葉・市原の三市の連携で発行する『千葉あそび』の散策をしながら食べる場をもって街の魅力に触れるという行事等の情報提供などを行っています。また、「よつグルメ研究会」のところでは市の方から申請をして頂きまして、その中のコラボ団体として「Y・Y・NOWSON」がちばコラボ大賞を受賞することができました。それから「チームよつてら」も、総務省のふるさとづくり大賞を頂いたということです。

「ちばユニバーサル農業フェスタ」についてはチラシ等を入れてあります。今年は12月4日に開きまして、文化センターの駐車場が一つ工事中ということで、エリア的には狭かったのですが、昨年以上の3千人を超える参加と、各福祉作業所ですとか農業者等が販売するブースの販売額も145万ということで、昨年に比べてそういう点でも賑わっております。その中で、障害のある人もない人も子どもから若い世代、シニアまで農業を通じて交流するというイベントになりました。また、小中学生、高校生もステージでの発表ですとか、四街道高校が下総高校、東京情報大学と連携をしてシクラメンの販売をする等、小中高生にも参加して頂くイベントになりました。大きくはそういうところです。

庄嶋委員長：はい、ありがとうございます。では委員の皆さんの方からご質問なり、感想なり、アドバイスなりをして頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

伊佐委員：どうもありがとうございました。3点ほどあります。まず1点目は大学生のインターンシップの方が8名今回いらっしゃったということなのですが、そのうち四街道市民が何名くらいいるか。2点目が「大きなテーブル」の話で、私の記憶ですと6月と、以前11月もあったかと思うのですが、その辺を今やっっちゃるかどうか。それから3点目が、これも「大きなテーブル」に関する話なのですが、報告書を確認しましたら、障害者からの相談について担当の方が来られなくて、その時は相談に応じられなかった、という報告があったと思います。恐らく障害者支援課さん、職員の方は都合がつかなかったのかなと思うのですが、四街道市は障害者相談支援事業所

も何か所かありますので、その辺の方も「大きなテーブル」に関わっているのかどうか。以上です。

事務局(勝又副代表理事)：大学生のインターンシップにつきましては、今資料がないのですが1名ですね。

伊佐委員：1名ですか。ちょっと寂しいですね。

事務局(勝又副代表理事)：むしろ柏とか東京とか遠くからいらしています。その1名の方はこれから四街道の市役所職員になりたい、というような思いがありました。12月4日の「ちばユニバーサル農業フェスタ」の時にも皆さんにおいで頂きたい、といった中で来て頂いて一緒にやって頂いています。

2点目の「大きなテーブル」は以前6月と11月にやっていたのですが、その11月の秋冬の方は、「ちばユニバーサル農業フェスタ」の中に出店するというので、固まった形ではないですけれども、それぞれ他市の方とも混じって販売をするという風になっております。そのアンケート等で、「大きなテーブルの方」が、「ユニバーサル農業フェスタ」で「大きなテーブル」のアピールをもっとした方が良かった、と言っておりましたので、もう少しその面を強めていきたいと思えます。

それから、最後の3番目の質問の相談担当の方がいらっしやらなかったということですが、障害者支援課さんと協力頂いていまして、その相談支援センターの方から来て頂いています。

伊佐委員：そうですか。例えば「ほほえみ」さんとか「ひだまり」さんとかですか。

事務局(勝又副代表理事)：そうです。それがたまたま近くの方のご不幸があったということで急に、やむを得ず。

伊佐委員：わかりました。障害者相談支援事業所の「ほほえみ」とか「ひだまり」もあるのですが、まだまだ周知されていないような印象もあるので、「大きなテーブル」の時にそうした周知に結びつくかな、という風に個人的には思っているのですが、来年度以降もその辺を進めて頂ければと思います。

庄嶋委員長：他にいかがでしょうか。

金子委員：今、初めて「みんなで地域づくりセンター」の総括的な報告を聞きまして、横断的に幅広くやられていることに対して大変敬服いたしております。誠に小さい質問です

が、17ページのところに施設利用状況の来所数が12月に突然3,420人とすごい数字になっているのですけれど、これは先程話された「ちばユニバーサル農業フェスタ」も含めて来所した、と数えられたわけですか。

事務局(勝又副代表理事):そうです。「みんなで地域づくりセンター」が主催、又は主催に近い形で協力したもののオープン以来含ませて頂いております。

金子委員:わかりました。もう一つコラボとかいろいろな形で出ておられるのですが、この「コラボラ」、というのがわかりませんでした。具体的にどういう意味なのでしょう。

事務局(勝又副代表理事):コラボとか「コラボラ」とか、コラボという名前が多すぎてわかりにくいというのが申し訳ないのですが、地域づくり体験プログラム「コラボラ」、コラボとボランティアがくっついた名前なのですけれども、これは市民の方に市民活動を知って頂いて参加して頂きたいので、そのために何日か体験して頂くということで市民活動団体の方が、そういう体験のプログラムを作ってそれを一覧表にして配布、募集をして体験に参加して、できればそのあと継続して頂きたいという考えのもとに行っているものです。一般の方にお配りしてもなかなか目に留まる機会がなかったりするので、今は市民大学にも協力を頂いて市民大学の受講生の方に配らせて頂いてそこからの参加が多いです。今年は延べで13団体に20人の方が39プログラム参加して、10人の方が継続して参加したいという希望を出していらっしゃるということです。

金子委員:私は市民大学で受講していましたよ。「コラボラ」、という言葉が結びついてなかったのですが、言われてみると確かにありました。ありがとうございます。これは非常に良い事だと思います。市民大学でやるというのは効果があると思いますね。

庄嶋委員長:他にいかがでしょうか。

私から質問ではなく感想があります。先程の報告の中で取り組まれている地域包括ケアですとか、それに繋がる部分がある高齢者の居場所づくり、それから子どもをめぐる環境ということについてです。子どもの貧困対策法ができて各自治体に取り組みが求められている状況で、たまたま先週の金曜日NHKの「特報首都圏」という番組で子どもの生活について取り上げられていました。30分番組の前半がうちの大田区の実践で、後半が川崎市の取り組みだったのですけれども、大田区で私も子どもの貧困対策の委員をやっており、その委員会での検討の前提として、小学校5年生全ての児童と保護者を対象に実態調査を行いました。子どもの時に、通常だとそういう体験を家庭の中でできていた方が望ましいこと、例えば家族で旅行に行くだとか、そういうことの実態を調べることを通じて、いろいろな事情でそれができていない子がこれだけ居るのか、というのが分かるというも

のです。所得だけでは見えてこない部分の状況の把握等も行いまして、それが珍しいというのでNHKに注目されました。

四街道市は、基本的にそういう現状の調査がまだなされていないという話だったので、それが必要なと思います。一方で、実際に地域の中で子どもに関わる活動をされている団体が四街道は非常に多いので、「みんなで地域づくりセンター」としてはそういう団体の活動を網羅的に把握していくことで、皆さんに提供していけるものがあるのではないかと思います。ヒアリングなどの延長としてやって頂ければと思っております。

今言ったヒアリングや取材という手法が、もともとこのセンターができた頃から非常に良い手法だと思っていました。他の自治体の類似のセンターには、スタッフの人達はそのセンターという場所にただ座っているだけ、という所もあつたりする中で、四街道のセンターは物理的に広くないぶん、スタッフの方々が地域に出て行っていろいろな事を調べています。話を聞きに行くと、聞かれた側はそのことによって自分たちの活動が認められているのだ、という気持ちをもつ事にもなりますので、そういった形でネットワークを築いて来られたなと思います。そこも引き続き頑張ってもらえればなと思いました。

もう1点。私、袖ヶ浦で今お仕事の手伝いをしている中で「まちづくり講座」という事業をやっております、その中で11月に市外の活動の見学に行こうということで四街道に来させて頂きました。「みんなで地域づくりセンター」と「日替わりシェフの店さくらそう」と、「チームよつてら」と、事例見学をさせて頂きまして本当にお世話になりました。とても皆さん感動しておりましたのでお伝えしておきます。ありがとうございました。

他にどうでしょう。

中村委員：資料を見させて頂くと、改めて四街道市は地道な活動を積み上げて来られたという感じがします。縦と横で繋がりを感じますし、コーディネートという機能が重要な視点だと思いました。そういった中で、私もいくつかの大学で講じている立場もあり、せっかくこの街は東京情報大学とか愛国学園大学とか連携協定が進んでいるところがありますので、その辺りとの接点はどう取っているのか、お聞かせください。

事務局(齋藤主査補)：市として包括、あるいは個別の分野で結んでいるところです。現場となると、個々の繋がりの中で膝を突き合わせて相談したり検討したりといった中では、「よつグルメ研究会」等が東京情報大学のプロジェクトと組んで商品開発をしたり、「Y・Y・NOWSON」では情報大の地区担当の先生と組んで講座を開くというような形で行っています。その繋ぎ役という事で、個別具体のところでは「みんなで地域づくりセンター」、もしくは行政が関わらせて頂いております。広い意味では産業振興分野の動きも広まってはいるのですが、みんなで地域づくりの中ではそのような形を取らせて頂いております。

中村委員：今お話頂いた「Y・Y・NOWSON」は私も接点を持たせて頂いて、大学と



の連携のモデルになれば良いかと非常に思っております。地域資源を上手く活かして継続性も見えている、ここまでのプログラムが年間を通して見えていれば、大学の立場で言えば是非コラボさせてもらいたいと思います。というのは、今大学では地域連携をすごく進めたがっていて、どこの大学でも街をフィールドに使って現場の学びを欲しがっています。特にこういう地方創生の時代、座学だけではなかなかできない、地域を元気にするための人材育成というのをどの大学も語って謳っていて、そういった意味では、大学も地域の中ではなんとなくバリアがあるような感覚も受けます。大学にとっても地域との接点を持つというのは意外と見えにくいですが、こういったプログラムがあれば、どのプログラムにも、大学のそれぞれの専門家や大学のマネジメントチームも興味を持つようなものがたくさん入っていますし、特に地域の方々と一緒に事業を展開するものは、学生も研究者も入っていけそうなものはたくさんあるなと思います。年間を通じていつも大学と接点を持っていくため、大学に「みんなで地域づくりセンター」の活動が見えていると大学からも接点を持ちやすいのかなと思います。それと、今のインターンシップの数が少ないという事も含めて、地域大学をもっとうまく活用すべきだと思います。パートナーシップは相手も求めているので、そういった意味では win-win な関係にできるのではないかと思います。高校の多い四街道市だからこそ、高校と大学との接点というのは、非常に分かりやすいですよ。大学も高校が多いと受験生に直結するわけですから大学も乗りやすい。そういうのも含めて教育に力が入っているのは四街道の特徴だと思います。だから、教育の場の市民活動をここまでやってらっしゃるだとか、そういったことを広めることで自然と大学からのパートナーシップが見えてくるのかなと思います。

もう一つ、自治会の情報交換会をやられているのもすごく良い。今、どこも自治会の現状は厳しいと聞く中でここまでコーディネートされているので、新しい価値をお互いに作り出せるのではと思うのです。四街道の既存の組織の状況が非常に厳しい中で、その既存の組織が地域づくりの土俵の中でどういう風に変化しそうか、あるいはその可能性をお訊きしたいです。

事務局（勝又副代表理事）：例えば旭ヶ丘地区では、社協と民生委員の方と自治会の三者が組んで、「ひまわりサロン」というのを毎日開催しているというのは一つのモデルになると思います。そこからみそらや吉岡の方へ広がっているので、連携することで生きてくるのではと思います。1月30日に開いた後は、できればこちらから地域ごとに出て行って、地域ごとの課題を皆で考えられるようにしたいと思っています。それにはここまで情報交換させて頂いた自治会やコーディネーターの方や社協と一緒に考えていければと思います。

中村委員：1点目の地域と大学の話なのですがけれども、私も今年で言うと千葉・市原の連携に関わっていて、その中で情報大での若葉区民祭りを秋に行っています。そこで毎年千葉市が中学生のための起業体験講座というのをやっていて、大学生と一緒に会社・

商売を作るということを体験し、区民祭りで実際に出店をしています。これだったら一緒にできるだろうと思って手を挙げて、昨年秋から、まだ細々ではありますが四街道と千葉、情報大でそういうのを一緒にやっているという事例もあります。

金子委員：厳密には市内で唯一の大学は愛国学園大学なのですが、ご承知の通り、教育委員会とはだいぶ提携が進んでおりまして、お互いに協定を結んでいて、この6年間は市民大学の専門課程を愛国学園大学で開催しています。私も受講していて、聞いてみると先生方にも知見のある方が多いです。せっかくそういう知見のある先生方がいるのだから、そういった先生方を教育委員会のみならず、地域づくりの方でも活用させてもらえれば良いのではと思います。

庄嶋委員長：ほかに何かありますか。

田中委員：実際、現場としての繋がり、報告・共有というところで、意見とか質問というわけではないのですが、自治会情報交換会や地域包括ケアという部分では、協議体が昨年10月に立ち上がりまして、その中で地域づくりや生活支援の体制づくり等の話が少しずつ進んでいます。

その中で大きな柱として三つのSというのを掲げていて、「サロン」：サロン（居場所）を歩ける範囲で二か所つくる、「支援」：地域でお互い助け合いのできる地域づくりをする、「相談」：歩いて行ける場所に相談できる仕組みをつくる、その三つで動いていこうということにしています。その中で、居場所というのは、一緒に作り上げていく部分である、ということと、生活者支援の体制というのは高齢者部門の話ですけど、縦割りではなくて、子どもも高齢者も一緒に住めるところというのを出していった方がいいよねという話が出たところです。しかし、市としては課ごとの縦割り業務がある等の課題もあり、具体的にどう進めていけばいいかはまだ決まっておきませんので、いろいろな部分で生活支援の体制と繋がりながら協力体制を整えられたらと思います。

中山委員：先程教育に関してインターンシップ事業での課題というのを指摘されていましたが、小中高と関連付けてみた時に、小学校の頃は夏休みのボランティア、これは素晴らしい企画だと思います。子どもの希望者がものすごく増えていて、子どもながらに関わってみようという気持ちが芽生えてきているのが非常に頼もしい。ただ、それが中学・高校に上がった時に、自分のやる事が忙しくなってきたりなかなか結びついていかない事が多いのかなと感じます。中学校の職場体験はうちの地域振興財団としては積極的に引き受けているのですが、11月に皆集中しているということで、11月は5つほぼ全部来るので、忙しくて「またか」という声が多く大変不評です。やってあげたいとは思っているのですが、中学校側の行事の関係で夏休みに2校くらい、11月に3校くらいやって、と順次展

開してくれると助かるのですが、なかなか上手く機能していかない。高校はインターンシップがありますが、これは高校には紹介されていますか。

事務局(齋藤主査補)：今回はしていません。大学のみです。

中山委員：高校もインターンシップをやりたいという人はいると思います。市内の高校にも投げかけてもらえると、地元の学生が増える可能性があるのではないのでしょうか。ただ、高校も希望の時期は大体決まっていて、たぶん夏休みか夏休み明け辺りの8～9月辺りに集中するので、集中すると受け入れる側も難しいという事もあるかもしれません。私は、子ども達を地元就職させたいという気持ちがあります。優秀な人材が皆東京等にどんどん流れて行ってしまう傾向にありますので、そういう方を引き留める上でもインターンシップ、それから中学校の職場体験というものを街ぐるみでもっと取り上げていく必要があるのではないかと考えており、またご尽力頂ければと思います。

庄嶋委員長：ありがとうございます。これで一巡り全員発言しました。一つ目の議題はここまでとさせて頂きたいと思います。では、次の議題に入ります。

議題(2) みんなで地域づくり事業提案制度(平成29年度実施)公開プレゼンテーションについて

事務局(齋藤主査補)：昨年末に前もって送らせて頂いた全13団体の資料と採点表・基準等をご覧頂きたいと思います。その後送らせて頂いた、資料2の「コラボ四街道ガイドブック」ですが、改めてこの制度の概要について何名かの委員から問い合わせを頂いたので、前段でそれにお答えする形で内容をご説明したいと思います。

【別紙資料NO.2『コラボ四街道ガイドブック2017』参照】

「コラボ四街道」には3つの部門がございまして、拠点づくり部門・地域づくり部門・アンダー19部門の3つの部門がある中で、今回は2つの部門から13の提案がございました。第1回目の委員会で、事業の振り返りという事で、昨年度の事業を皆さまにご覧頂いたかと思うのですが、その中にはなかった拠点づくり部門の提案が2件あり、金額も多かったです。基本的に地域づくり部門については50万円の上限で補助金を交付していて、拠点づくり部門についてはハード整備を中心とした地域づくりをする活動について、500万円を上限に、補助対象経費の80%の補助をさせて頂いていますこの原資については、四街道市で民間都市開発推進機構、通称民都機構から2,000万円の資金拠出を受け、その中からこの拠点づくり部門の費用を充てています。今回の2件の提案は、

それに則った形なので受理しており、その審査をして頂いて採決を決定し実施するという形です。拠点づくり部門に提案してそれを地域づくり部門、ソフトで回していくということで1団体が両方の部門にエントリーしていますが、これもルールに則った提案がされています。今回、アンダー19部門、若い方々の提案はございませんでした。

金子委員：質問ですが、今の民間都市開発機構というのは、どこのどういう種類の補助金という形になるのでしょうか。

事務局(齋藤主査補)：国交省系の団体として、私どもが戴いている拠出金については地域づくり、地域を活性化させる事業については民間の市民団体や事業者等々に資金拠出ができる補助金となっています。

金子委員：全く市の予算とは関係なく、市の方で自由に使っていい、というのですか。

事務局(齋藤主査補)：細かく言うと、第三者機関の審査の下、公開で審査を行なわれ採択されるものについて交付して良いとされていて、行政側が審査して交付するものではないです。みんなで地域づくり基金、というところに一旦2,000万円が入りまして、最終的には市の予算としてハード部分に充てていく、という形です。

金子委員：市の予算にはなるけれど、出処は機構から、ということですね。

庄嶋委員長：何かの時に使えるものとして持ってくる形で、実際に、過去の例として「Y・Y・NOWSON」が使っています。

事務局(齋藤主査補)：3年前に整備して、ソフトで回していきたい、というのがちょうど今回評価されました。

金子委員：ではこの予算を使って、ソフトの年間の実費的なものは市のコラボの予算で出す、という考えでよろしいでしょうか。

事務局(齋藤主査補)：はい。

金子委員：わかりました。

伊佐委員：すみません、その関連でひとつ。特にこの拠点づくり部門については民都機構を使うという事で上限500万円とかなり高額になっています。この制度について、シテ

イセールス推進課以外の課、例えば福祉関係とか、そういった所の職員にもこの辺の事が周知されているかどうかを知りたいです。具体的に言えば、障害のある人を支援している団体から新たにグループホームを作りたいという希望が出た時、窓口は障害者支援課だったりしますが、国や県の助成金は難しいので市として助成してほしいという希望が出ることがあります。その時に、市の財源がないという事で難しい、という話があります。グループホームを作るという事が拠点づくり部門に適しているかはわかりませんが、例えば障害者支援課の方でこういう支援も四街道市ではやっていますよ、というのを事業者に言って頂けるようになっていけばいいなと思います。その辺の横の連携というのはどういう感じでしょうか。

事務局(齋藤主査補)：少なくとも市の制度という事で、順調にこの制度をご理解頂いているという前提で、提案のあった関係課については、その提案を通して意見をもらっています。今回の資料の中にも関係課の意見書、というのが入っているかと思いますが、今回で言えば福祉関係の福祉政策課に拠点づくり部門で意見を投げかけたものもあります。そういった経由で制度のご理解は頂いているものと思っております。昨年度で言えば、まさに障害者支援課関係各所ですね。

伊佐委員：しごと受注協議会ですか。

事務局(齋藤主査補)：意見書を貰ったりしております。

伊佐委員：わかりました。ありがとうございました。

事務局(齋藤主査補)：それでは、資料を基にご説明させていただきます。

【別紙資料『みんなで地域づくり事業提案制度(コラボ四街道)提案書類等の送付について』綴じ込み資料参照。※以下、補足のみ記述※】

・2枚目の横長の別紙資料1の新規継続という欄に書いてある丸数字は何回目のエントリーかの数字です。審査に当たっては過去の実績等も含まれてくるのでご承知願います。

・別紙2の縦長の資料はプレゼンのタイムスケジュール表です。(1)の「からくり倶楽部」と(9)の「ちょこっとクラブ」の都合が合わなくて変更の予定なので、最終的なスケジュールは当日に。

・別紙3は12月28日の通知でのご案内通り、事前に提案書をご覧頂いて質問がある委員は、本日までに事務局にご提出頂けましたら団体に投げかけさせて頂き、回答を戴きます。金子委員からの事前質問を2件、本日の資料に加えてあります。

・審査基準に入る前に、提案書を読んで事前質問に書くまでもないけれど、確認・共有したい事項がもしございましたら、場合によっては質問書という形で投げかけさせて頂きま

す。

庄嶋委員長：いかがでしょうか。

伊佐委員：すみません、いいですか。今回、申請のあった団体で、「ちょこっとクラブ」と、「DAINICHI 貯筋クラブ」を確認したのですが、それぞれ拠点が違うというか、「ちょこっとクラブ」は千代田中心で、「貯筋クラブ」は大日と付いているから大日が拠点なのかな、というのはわかるのですが、私の確認した範囲では主旨として少し似ている印象を受けました。平成29年度という事でもなく、これからもこうした取り組みというのは増えてくると思います。それこそ超高齢社会なので、介護予防を目的としたような団体は出てくると思います。今後、例えば千代田・大日以外に、美しが丘だとかさちが丘だとかその地域ごとでこうした動きが出てきたとすると、その都度「コラボ四街道」で検討していくとなると、団体が増えていくような気がします。その辺は私の考えではある程度、四街道市全域に渡るような取り組みが好ましいのではないかな、という風に思っているのですが、今後、地域ごとで同じような目的の団体が申請した時にどう対応していくのか、その辺りのお考えがありましたら事前にお訊きしたいです。

事務局(齋藤主査補)：これも考え方の部分になってきてしまいますが、全体を網羅する団体の必要性和、顔の見える関係性でしっかりその地域で育てていくという大切さををどう捉えるかだと思いますので、個人的には全く問題ないと思っているのですが、なかなか行政のサイドでこれは門前払いで、これは受け付けるといったところはちょっと判断できないかなというのがあります。また総合型補助金の宿命と言いますか、福祉から教育から環境から、いろいろなジャンルのもを受け付けられるといった側面もあるかと思えます。もちろんその個別の担当課にある補助金ですとか、助成金のメニューはあるかとは思いますが、そういったところも上手く活用しながらも、総合型補助金である以上、そのルールに則って提案されたものについては受けさせて頂き、審査させて頂くといったところになるかと思っております。

金子委員：すみません。今の伊佐委員の質問に関連するのですが、確かに地域型のクラブが増えた場合、ある一定の予算の範囲があると思うのです。そうすると今まで50万円交付していたのが、団体が多くなると、例えば20万円ずつになるというような、要するに予算には補助額の増減で対処するという事も可能なのでしょうか。どんどん増やして例えば20団体なんて増えた場合には、無限には予算はあるとは思いませんので、その場合には、方法の一環として、少しずつ交付する、少しずつ補助を持っていくという形でやるのはどうでしょうかね。我々はそれでもいいからもっと増やしたいという形に考えているのですが。

事務局(齋藤主査補)：その団体の活動に比して20万円が多いのか少ないのか、これも性質によるので、10万円が多い場合もあると思いますし、今なかなかここでその線引きをすとか、一律でこうしていくというのは判断できないところです。補助金の見直しといった意味では、例えば傾斜的に補助率を落としていくとか、補助額を落としていくとかという方法もあるかと思いますが、今後の議論の中で詰めていければいいな、というところです。

金子委員：これから審査基準が関係してくるのは、将来の投資を考えた場合に、ある一定の予算額しかないのであれば、今のように傾斜型とか、薄く幅広くやってその団体の受け皿をたくさん増やしたりというのはなかなか図れない問題だと思うのです。この辺は審査基準のところでもまたちょっとお話しします。ありがとうございます。

庄嶋委員長：四街道の場合は、金額の総額上限が最初にあって、その中に収めるというやり方をしていません。他の自治体は、そもそも年間の補助金額の総額は幾らまで、というやり方なので、そういう事になると、今のような話で、良い事業がたくさんあるけど、補助金を出せるのは上位からいくつまで、というような話になります。でも四街道はそういう方式を取っていないくて、ちょっと珍しい方式かなと思います。

金子委員：私は、四街道は財政状況が厳しいから上限があって、その中である程度抑えるのかと思ったのですが、これは今の段階では無限とは言わないまでも、良い提案であれば、上限なしに出せるという風に考えてよろしいのですか。

庄嶋委員長：今のところそうですね。

事務局(齋藤主査補)：このひとつ前の制度はやはり上限を設けて、年間予算の上限で出てきた団体で、仮にある程度評価があっても全額補助されないこともありました。

庄嶋委員長：後は順位の中で落ちるという可能性もあったわけですね。けど逆に今の場合は、金額の上限が最初から定められてはいないので、先程の審査基準をちゃんと満たしているかないかで判断し、満たしているものは合格だけど、満たしていないものは落ちる、という形にしていますね。だから比較的毎年、受かっている割合は高いですね。落ちるという言い方はあれですけども、採択されなかった事業の数は毎年少ないです。

金子委員：積極的に提案・採用できるわけですね。一般的には自治体といたら予算上限が決まっているから苦しい、という話になるのですよね。

事務局(齋藤主査補)：それ以外に懸念事項というのはあるので、今日の3番目の議題のところ団体の活動の継続性の話とか、そういうところをどう考えるかというのもちよっと後で話したいと思っております。

金子委員：わかりました。

事務局(齋藤主査補)：それでは審査の方針、審査基準について確認したいと思います。

【別紙資料『みんなで地域づくり事業提案制度(コラボ四街道)提案書類等の送付について』綴じ込み資料参照。※以下、補足のみ記述※】

・別紙4は本来であれば提案団体に募集をする時点で、標題の(案)が取れている状態で公表すべきところなのですが、会議のタイミングなどもございます関係で、改めてここで確認といった形でできればと思っております。例年と変わりございません。

金子委員：審査・採点は委員5名でやるという事なのですかね。

事務局(齋藤主査補)：6名ですね。委員の持ち点が5点ずつ6名ですので、トータル150点です。

金子委員：それは平均点で出すのですか。

事務局(齋藤主査補)：そうですね。トータルを委員数で割りますので。

金子委員：委員と事業によっては、外れる時もあるのですか。

事務局(齋藤主査補)：そうですね。それもあります。

庄嶋委員長：例えば、この委員の中のどなたかがある団体のメンバーであったり関係が強かったりという場合は、その団体の審査からは外れて頂きますので、そうすると合計点を出した場合に1人分の点数が少ない事になってしまいます。そこで、その団体の審査に関わった委員の人数で割って平均点にすることで、比較をしているという形ですね。

事務局(齋藤主査補)：今ちょうど話題に上りました平均点で、15点以上のものを採択するといったところ、今回、提案されている団体と構成員若しくは運営に直接関係がある委



員は、お申し出頂いて採点から除かせて頂き、プレゼンテーションの際も質問等からは除かせて頂く、といった形でやらせて頂いております。

次に、資料の説明だけさせていただきます。その採点に関わりまして別紙5に、採点評価法をつけさせて頂いております。先程の5項目に基づきまして、こちらの表に整数で点数を記載頂ければと思います。またコメント欄につきましては、全て記載する必要はございませんが、仮に採択するにあたって附帯条件というのを付けて採択する場合もございますので、特に気になった点ですとか、ここをクリアしてくださいといった点がございましたら、コメント欄にご記入頂きまして、採否通知にあたって参考にさせて頂きたいと思います。この表は当日改めてお配りいたしますが、事前に書類などご覧頂いて評価をつけて頂いたものをお持ち頂いても構いません。またこの採点にあたって、現在2月23日当日は委員6名の方全員ご出席というご報告を頂いておりますが、過去、当日ご参加頂けなかった委員もございました。その委員につきましては、書類審査とプレゼンテーションをもって審査・選考を行う方針に基づきまして、事前に書類の点数を付けて頂いていても、選考の点数から除いて選考を行わせて頂きました。当日、何かしらでご出席が頂けないような場合は、過去の例に習いまして、採点の方から除かせて頂いて選考を行えればと思います。以上で説明を終わらせて頂きます。

庄嶋委員長：では、今のご説明のあった審査の点について、何か確認をしておきたいところがあれば。特に皆さんは今回、初めて審査される方ばかりですので、ここでしっかり確認をしていきたいところですが、いかがでしょうか。

伊佐委員：すいません。事務局にも相談したのですけれど、今回申請している団体の中で、「よつかいどう和棉ばたけ」というのがあって、私はここの賛助会員です。一応、会費は出しているのですけれど、私は評価に入っていないのでしょうか。

事務局(齋藤主査補)：昨年、ある委員が、どこの団体かは忘れましたが寄付を出した事があります。実は選考をした経緯もありまして、賛助会員というと、難しいですね。

事務局(黒岩リーダー)：昨日、私が伊佐委員に聞いてから、ちょっと共有がしきれていなくて申し訳ないのですけれど、基本的に皆さんいろいろな地域の団体と関わりがある方が結構多いと思います。その中で、関連性の全くない団体の方はいらっしやらないと思っています。申請者の、例えば3人に含まれているだとか、この企画運営に密に主体的に絡んでいるだとか、かなりコアなメンバーでなければ、私は選考頂いていいのかなとは思っています。伊佐委員には昨日、そうした表現で回答させて頂いたところです。以上です。

金子委員：それでは私も自然同好会のメンバーなのですが、あまり活動はしていません。

て、特に小学校の環境教育には全く参加していません。今の話だと私も評価できるのではと思いますので、この自然同好会の審査に参加してよろしいでしょうか。

庄嶋委員長：結局、他の団体の方がそれをたまたま知っていたりした時にどう思うか、というのがありますよね。確か会員ではないのかな、と。知られている可能性はありますね。

どこで線を引くかですよね。例えばコアメンバーなのか、役員とか理事とかなのかで線を引くのか、それとも会員で引くのか。会員も正会員で引いて、賛助は容認するのかとか。そこはこちらで考えるというよりも、結局、何かクレームがきた時に事務局に行きますので、そちらで判断して頂ければと思います。

事務局(齋藤主査補)：自然同好会の関わりも含めて、ここで確認し切れないものもあると思いますので、当日までに確認させて頂くという形でよろしいでしょうか。

金子委員：わかりました。参考までに、自然同好会の事業概要を見ると環境教育とか公園の名札付けですよね。大変素晴らしい事業です。これは私と全く関係しておらず、散策だけしか参加していないので、恐らく皆さんから何か言われると思うのですが、一応、会員である事は間違いないです。

事務局(齋藤主査補)：自然同好会の場合、数百人の会員がいるというのは聞いていますね。濃淡が余りにもある団体なので、個別具体的に話した方が良いと思います。

金子委員：はい、わかりました

庄嶋委員長：そのほかに何か確認はありますか。

金子委員：それと、もう少しだけ。先程の話だと、我々は7分間に、この評価表にその都度点数を書かなければいけないわけですね。

庄嶋委員長：基本的にプレゼンテーションが終わった後に、大体30分位時間を取ります。そこで付けて頂ければと思います。早い方は聞いてその都度どんどん付けられると思うのですが、やはり全体を聴かないと、という場合や、一応付けるけれど、全体を聴いて調整をしようとか、あの事業に何点付けたのだからこっちの事業はこうしよう、とかがあると思います。そういうのに30分位は時間がかかるので、そこで取ってあります。コメントなんかも全部書く必要はないのですが、その時間に書き込んで頂いたりしています。

金子委員：あと先程質問すべきだった事なのですが、提案事業のおしゃべりサロン「ぬく

もり」は施設整備、拠点づくりになるわけですね。

事務局(齋藤主査補)：拠点づくり部門ですね。

金子委員：要するに補助金は1回のみで、来年以降は多分発生しないだろうということでもよろしいでしょうか。

事務局(齋藤主査補)：恐らくそうですが、また来年はどういう考えがあるかはわかりません。

庄嶋委員長：そういう意味での確認という事で言うと、これはいわゆる事業単位での申請なので、同じ団体でも全く違う事業になっていれば、仮に前の事業で3年間補助金を貰っていても提案できるということで、「科学未来・からくり倶楽部」は昨年までもやっていた事業と全く違うものを今回提案していますね。

事務局(齋藤主査補)：もう、全く違いますね。

庄嶋委員長：昨年まではいわゆる、皆さんの思う科学実験的な内容の教室をやっていたものが、今度は学校にプログラミングの科目が入ってくるという事で。プログラミングの教室、そうきたか、という感じですね。それも、科学と言えば確かに科学ですね。

事務局(齋藤主査補)：ちょうど皆さんが委員に就任される前から3年間、小学校単位で実験の支援をされていました。

事務局(齋藤主査補)：1点、漏れがございます。(11)・(12)の「おやかフェツリーハウス」につきまして、これは単純にスケジュールの問題です。ハードを整備してソフトで回していくという事業なのですが、事業単位での提案という事で、14分・14分でお時間の方は取っております。ただ、ご相談なのですが、ハードの説明の後にソフトの事も聴いた上で、この辺り全部聴いてからのまとめて質問がいいのかなということがあります。もしその方がよろしいというのであれば、団体の方に14分説明していいかというところもあるかと思っております。

伊佐委員：個人的には拠点づくりで7分、地域づくりで7分、分けた方がいいと思います。

事務局(齋藤主査補)：質問もその都度行う、という事ですか。

伊佐委員：他の申請団体から見ると、あそこだけ通して14分か、という風に思われるので、部門が違うから、2つに分けて申請できているのですよ、という事を説明する意味でも、私は分けた方がいいのではないかと思います。

中山委員：私も全く同感です。事業の部門が違うので、部門ではっきり分けて何番目ですけど、という事でやっていけばよいと思います。今回はアンダー19部門がないので、それが残念なのですけれど。それがあればもっとはっきりと区分ができたので良かったと思いますけれども。やはり部門別の方が我々も質問しやすいし、詳しく話が聴けるのかなと思っていますので、それでよろしいのかなと思います。

庄嶋委員長：他にいかがでしょうか。

金子委員：私はこれに関して事前質問を一緒に出しているのですけれど、地域づくりを先に説明してから拠点づくりの順番になっているのをよく考えないといけないと思います。先に「おやかフェツリーハウス」ができなければ、きっと地域づくりができないですよ。だからそうであれば拠点づくりを先に説明してもらわないと。いきなり「カフェツリーハウスの」と言われてもピンとこないのです、これは拠点を先にやってもらわないと。

事務局(齋藤主査補)：そうですね。ハードの中でも事前のヒアリングで、ここは切られてもいいけれどこれを切られてしまうとできない、というものは聞いております。これもどのような判断になるのかによってなんですけども、確かに順番としては拠点を説明頂いた後に地域づくりの方がしっくりきます。

この件に関してはどちらかと言えば、拠点があってその中に地域づくりでアーティストを呼んだり等があるわけだから、本当は拠点づくりの他に地域づくりでの提案が幾つかあると思うのですよね。ますます拠点づくりが何の目的か、という事をきちんと説明して理解を深めさせてもらいたいと私は感じていますのでむしろそちらを重点的にやってもらいたいです。

庄嶋委員長：他の皆さんはどう思われますかね。私は逆の考え方もあるかも知れないなど、何をやるかが見えてきたから、それに必要な設備はどうなのか、という見方もできるかなと思いますが。

金子委員：私もそう感じたのでよく読みました。地域づくりは確か、アーティスト云々というのは結構狭めでした。拠点づくりは結構広いです。本来拠点づくりに全部入れてもいい位の事だと私は思うのです。私はむしろ拠点づくりを重点的に置きたいと思っていますところで、それを活用する1つの例として、こういうのがありますよ、という形になる方が

説明を受ける側としては自然な気がすると思います。

庄嶋委員長：中山委員のお話だと、部門別に進んでいった方がわかりやすいから、地域づくり部門が全部終わってから拠点づくり部門の方をしていく、ということですね。今の順番の話としては、部門別に見ていくということではそういう考え方ということですね。だからいろいろそれぞれ考えがあると思うのですけれど、それも踏まえていただいて。

事務局(齋藤主査補)：改めて検討して、当日、そのようにアナウンスもさせていただきます。

庄嶋委員長：ともかく、14分続けて話すのはなしにしましょう。それは委員の皆さんそう思われたと思います。7分説明して、7分質問して、それで、また同じ団体なのだけでも、今度は部門が違うという事で説明いたします、としましょう。

他にどうでしょうか。確認しておきたい事ありますか。

私の方から、ちょっと一言。7分というと一見短いようなのですが、決して短くはないというか。他の自治体と比べても決して短くはなく、何が大事かという、基本何をやるかは書類に書いてあるという前提で進めます。書いてある事をよりわかりやすく伝えるとか、不明な点をそこでしっかり確認する、という意味のプレゼンですので、当日のプレゼンが上手いとか下手とか、上手いから高く付けようというのはなしでお願いしたいと思います。7分間で過去にもそういう確認でやってきていますよ、という事です。

他にどうでしょうか。よろしいですか。ではもう1つ議題があるかと思うので、次に移りたいと思います。

### 議題(3) みんなで地域づくり事業提案制度の見直しについて

庄嶋委員長：見直し、という非常に大きな言い方になってはいますが、実際やっていく中で課題が見えてくる部分もあるので、その辺りを今日は共有して、皆さんそれぞれのご視点があると思いますので、そこからご意見を出して頂くという位です。これが審査の仕方の共有に繋がっている点もありますので、今日のこの段階でやっておきたいという事で議題に挙げました。

【別紙資料NO. 3 『コラボ四街道補助終了後に団体が活動を継続するうえでの課題等』参照。※以下、補足のみ記述※】

事務局(齋藤主査補)：

・コラボ四街道の制度は4年目を迎え、補助上限3年の期限を過ぎた関係で、「コラボ四街道」を卒業した団体も出てきています。

- ・過去に1団体、取り下げの団体もあったので、27団体がこれまでこの制度を利用して頂きまして活動を行っております。
  - ・ページをめくって、提案制度です。提案を受けてその提案に対して歳費を決定して補助金を交付しているといったものが多くあるところ特徴的な市民活動支援制度をしている団体を3つ紹介します。
- 「コラボ四街道」の補助のあり方ですとか、皆で地域づくりをどう進めていくかといったところで、議論のきっかけといったところで資料のご説明をさせて頂きました。以上です。

庄嶋委員長：ありがとうございます。今日は時間も限られているので、こんな見直しをした方が、こんな制度にした方がいいというところまでは決めません。皆さんはこれから初めて審査をされますので、審査してみて気がつくところもあると思います。我々が審査する際に、過去に採択された団体の状況や、継続がなされているかを考える中で、今は3年間まで継続して補助を受けられる制度ですが、3年経った後にどういう姿になってほしいと思うかというのは大事なところだと思うのでそこを共有したいです。資料ナンバー3の採択状況のページで確認なのですが、×が付いているのはもうやっていないという事ですか。

事務局(齋藤主査補)：はい。

庄嶋委員長：事情はそれぞれあったとは思いますが、△は何でしょうか。

事務局(齋藤主査補)：一時休止です。

庄嶋委員長：あとは○。27年度くらいまで事業を活用してやっていたような場合は、その先どうなるかはわかりませんがとりあえず継続ということですね。過去の審査の話共有させて頂くと、審査基準の5つ、その中で4番目、「実行力・実現可能性」というのは幅広くいろいろな視点が入ってきます。ここにお金の使い方の部分、事業の内容、規模、成果等に見合った妥当な経費の見積もりがされているか、というのがあり、これは、その年度で出る成果もあれば、長期的に設定されているものもあります。そのため、3年間で全てが達成されるわけでもなく、その後も続いていくということで、逆に言えばこの補助金がなくなっても事業が続けられないと成果も達成できないということになります。

そういった意味で、審査では、継続の状況を考えたような経費の見積もりをしているかどうか、例えばもらっている間だけ付けられるような費目を、いざなくなったら削る、というような使い方はどうなのか、などを見ていました。3年間同一事業でいくわけですが、2年目3年目になるにつれて、同じ事業でも審査での見方は厳しくなる。補助率を下げるようなことはしませんが、見ている側として「今の状況のまま3年終わったら続けられない

くなるのでは」となったら3年目はもう無理じゃないか、と採択しなかったこともありました。2年目に、課題があるのでそれをクリアしてください、という付帯意見をつけてもクリアされていなかったことで採択しなかったこともあります。ただ、それらの基準はあらかじめ示されたものではなく、審査の積み重ねの中でケーススタディ的に培われてきたものでした。

今回、初めて審査をしていくにあたって、事業の継続というところについて皆さんはどう考えられているか、今やっている事業終了後も自力で継続できるような状況がいいと思えば、我々はそのように審査をすることになります。

ものによっては資金的な支援のサポートの中で助成金を使い、担当の関係課がその事業の意義を認めて独自に予算をつけたりして継続しているケースもあります。収益は上がらないが公共性があるという場合は役所が意義を認めて事業化をするという出口もあります。先程の健康づくりの事業が沢山増えたらどうなるかにも関係しますが、それだけ増えて意義があるものと認められれば担当課で仕組化して支援するというのも一つの答えです。そういう意味で、「コラボ四街道」は実験的な、先駆的な要素として使って、そういったことが証明されてきて、一部の地区だけでなく他の地区にも共通する課題があって対応すべきであればそれは各課で、という風な出口もあります。しかしそういう出口が必ず準備されるとは限らないので、3年後どうなっているかで審査の見方が変わってくると思います。

今何かあれば、一言ずつでもお願いします。

伊佐委員：前段で、今までそのコラボ四街道採択団体で3年間終了したところのひとつに「ともに築く未来の会」があり、私も少し関わってはいて、詳細を覚えていないですが事業としては「わくわく市民活動フェスタ」をやるというのが事業で上がっていて2月に行っていました。残念ながら補助金が切れたせいなのか、他に理由があるのかわかりませんが、今年の2月はやりませんでした。「わくわく市民活動フェスタ」をまた来年以降再開できるかどうか見通しが立っていないように感じます。市内の小学校をずっと回ってきて、市内12あるうち9校まで回って残り3校。資金面や人材のこと等で今年の開催はありませんでした。行政はその辺についてどう評価されているか訊いておきたいです。

事務局(齋藤主査補)：その会議の場に私も担当として出ていましたが、話の中心は予算がないから、ということではなかったのかなと思います。人的な面と、「ともに築く未来の会」としての団体の存在意義等に話が及んでいた中で、その一つとして「みんなで地域づくりセンター」のサポートをしていったらどうか、という話も出て、そういった形でこれまで築いてきたネットワークをもっと広く還元していくという話の流れは担当としては非常に歓迎していました。「わくわく市民フェスタ」をやる・やらないだけを見て良い悪いの判断をするのではなく、今まで築いてきたものをこの後どう違う形で生かしていくかに議論が及んでいたので、今後についての感想は、期待するところと、一緒に相談してやっていけ

たらな、といったところです。

伊佐委員：わかりました。

金子委員：私も委員長が仰っていた継続性というのを。補助金を打ち切られたら終わるといのは困ります。説明の中であった、27年度にコラボが終わったものは、今の「ともに築く未来の会」のようになんらかの形で継続されているものが多い。28年度が確定額も書いていないのでよくわかりませんが、一番気になったのは「Y・Y・NOWSON」です。ホームページを拝見したところコラボ大賞貰ったような素晴らしい団体のようで、拠点づくりにずいぶんお金を出したくらいで後は自分たちで賄っているようですが、こういうところが今年度終わるわけですからどうなっていくのか関心あるところです。あの方たちは、今年打ち切られた方たちもそれぞれいろいろな形で自らで生き延びるようなことを一応考えているのでしょうか。

庄嶋委員長：28年度は今やっているの確定ではないですね。27年度までのものは補助金事業としては終わっています。補助金が切れてもその後1年くらいは頑張るといのはあると思うので、真価が問われるのは2年3年あとで、まだサンプルは少ないです。ただ、×とあるように終わってしまったものもあり、そういう風になるのは本来望ましくありません。

特にイベントもの、具体例として「さくらそうフェスタ」はずっと資金的な課題がある、というのは委員も認識していて、そこで補助金がなくなった後も続けられるような体制を整えていってくださいね、とメッセージを出しながらの支援でしたが、結局そこで切れてしまい、大変残念でした。その辺をどう考えるのかということなんです。そうなったら、関係課が重要・必要と思って事業化を図るといのもありますが、そうではない場合も自力で続けていけるよう3年間を有効に使ってほしい、そういう風に審査したいと私は思いますが、人によって見解が違うかもしれません。

中山委員：どこまでのサポートをしたのか教えて頂いても、今、人もお金もないのが当たり前のような状態で市民活動というのは非常に難しいですね。「サクラソウフェスタ」がどこまでやったかは知りませんが、そういったいい位置でスタートしたのにお金がないからやめる、というのはなしじゃないかなと思います。その前になんでサポートができなかったのかなとも思ったので、採択した時にどういうサポート・支援・コーディネートあるいは伴走してきているのか、そういった現状をお伺いしたいです。

事務局(齋藤主査補)：全てにおいて十分なサポートができたかと言うとそうではないかもしれませんが、求めてきた団体に対してはおおよそ全てに対応しています。一個一個ど



ういうサポートかという時間がかかってしまいますが、相談対応、繋ぎ、場所の提供等、資金以外の部分でできる対応は「みんな地域づくりセンター」や行政でさせて頂きました。

中山委員：その辺りで統一したサポート、個々に金額も違うし内容も違うし団体としても違うけれども、統一して何か月に一回はこういう項目でもってチェックしたとか、ガイドラインみたいなものはないですか。

事務局(齋藤主査補)：サポートのガイドラインはないです。

中山委員：なるほど。そうすると、先程の3年後のイメージという話と今の話を考えると、市民団体の難しさ、というのはこの辺にもあると思います。人・者・お金・情報がバランスよく運営できる団体はほとんどない、でも、すごく柔軟な発想だったり新しい可能性を持っているから、地域づくりを推進しようということによってこういう土俵を作ってらっしゃるということだと思います。だとすれば、四街道ならではの、支援をするためのガイドラインがあって、かつ、ずっこける前に課題を抽出したり、調整をしたり、他団体との連携や他の庁内のセクションとの連携というので意外とカバーできてしまうのではないかと思います。他の庁内とのセクションというのは、採択した後に良いものが見えたりということもあると思います。この街だったらできる、このコーディネーターと機能を持っているからこそできる、という仕組みづくりはベースとして結構重要なのではないのでしょうか。では今のような形でどこまで任せるかという話ですが、任せられる方はすごくありがたいですが、任せるところでやったことのないことができるかということ、現実的には難しい。そのため、縦と横の繋ぎ方を定期的にチェックするような機能は、どの団体であっても統一した何かを持っていた方がいいのではないのでしょうか。

金子委員：それに関連して、私は途中退席してわからなかったことで、いずれは継続になるかどうかという話になると思うのですが、年度ごと、3年ごとに支援団体ごとに自己評価が上がるようになっていたのでしたっけ。プラン・ドゥ・シーのシーの部分を知りたいです。

事務局(齋藤主査補)：途中ご退席された前段で行われた事業振り返りというのがそのシーに当たりますので、やらせて頂いています。

庄嶋委員長：その年の事業の結果報告、というのはありますけれども、2年後3年後にこんなことやっている、というのを把握する仕組みはなく、今回こういう議題があったので調べて頂きました。その辺りを検証する意味では、数年後の状況把握を時々でいいからや

った方がいいかなと思います。

金子委員：そのレポートが読み取れる課題、というのがこれに出ていたわけですね。各団体から出された評価書みたいなものを見たら、こういう課題があったから出されたと。

事務局(齋藤主査補)：当然、ヒアリングですとか、見えてくるものというものとして、というところです。

庄嶋委員長：この話と絡むのが、「チームよつてら」の話で、27年度と28年度で補助を受けていたのですが、29年度は申請しないと聞きました。なぜかという、今は皆さん高校生や大学生なので、メンバーの交通費等に補助金を充てていますが、3年後、その後の姿を描いた時に、今当てにしている補助金がなくなった時にその形がとれなくなるだろうという話でした。今後も身の丈に合った形で継続することを模索した事になった結果、補助金は使わないで継続を実践したいということでした。

こういう地域活動はボランティアで動く人が確保できて、その人たちの無償の労力で成り立つ形が確立できていけば続けられます。有償ボランティアという形もあるが、補助金がある頃に有償化する部分が大きくなりすぎると、お金がなくなった時にどうするのだ、という問題もあります。もし有償で出し続けるのであれば、違った収入源が必要になる。ボランティアベースでいかない場合は、補助金を貰っている間に、対価を得られるような何かのサービスを確立して、その収入で必要な経費を賄っていく、あるいは支援をしてくれる団体からの協賛金を得るなどの戦略が求められるかなと思います。その辺を見ていくと、過去は判例的に蓄積される中でやってきていたので、実際審査をやってみないと具体的な部分はわからない事もあります。一応、そんなこともありました、ということで今日は共有させて頂きました。それを踏まえてどうでしょうか。

中山委員：「チームよつてら」は、うちが寺子屋事業を展開しているものですから、財団として団体が立ち上がるずっと前から支援し、深く関わってきました。その時は全て送迎をしていましたが、送迎中に事故とかがあったらどうするのだということもありましたので、補助金を貰って交通費を賄おう、ということでコラボに出しました。

そうすると今度はいろいろな書類を提出したり、お金を計算したり、本来の仕事とは別の仕事が増えてくるということも事実としてありました。財団の方としても、学力向上にはつながらないけれど、例えば四街道公民館では継続的に月2回実施、他の所では夏休み・冬休み・春休みの長期の休みの時にしか行わないとしてきました。しかし、公民館で月2回にすることでしっかり参加してくれるようになると、書類の負担が段々大きくなってきました。代表者が3年間続くとともに限らず、大体2年で総とっかえになるので、副代表は大学1年生とかの若い人でやって覚えてもらいましたが、組織力がきっちり出来る時と難し

い時があったりして、いろいろな問題が起こっていて、次はやりません、となりました。やっている内容は本当に素晴らしい。自分のところでやっている事業なのですが本当に応援している事業で、学生がボランティアをしてくれて、会議をする時は随分遅くまでやってくれて、本当にありがたいと思っています。

別な形では、本当は教育委員会等からの支援の方が手厚いのではないかと思います。というのも、先ほど書類を見た時にアンダー19の方の部門からは出ていないというのは、そういうことの作文に学生は慣れていないということで、そうすると、部活の顧問の先生がこれを見てうちのボランティアの部活でこういうのをやったらどうか、と言っても、学生がいろいろな書類を仕上げたり、会計報告をしたりするのは非常に大変なものがあるのだろうと思います。教育委員会等とも連携を図りながら、別な枠でのそういう支援があると、教育に関係する部分ではあった方が良いのではないかと思います。

基盤となる組織力が他の団体さんはずっと代表者がずっと長年変わらないと思うのですが、もう2年位で変わらざるを得ないというところが厳しくて、そこをなんとかしなきゃいけないと思います。高校3年生となると進路も大きく変わってしまいますので、どうしても大学1年生の方に次の代表となって頂いている。それでも大学2年、3年となっていくと特に就活ともなると忙しくなって、せつかく他の団体が視察に来て肝心要の代表がいなくて別な方が対応したりしていることも多いです。

金子委員：「チームよつてら」の事は、栗山小で学校評議員していたのでよく存じております。サマースクールなどもやっていたので実際援助もお願いしている。おっしゃる通り、代表が変わると連絡がつきにくくなる。これはアンダー19だからかもわからないのですが、学生に代表をさせなくていい方法とかはないのですか。

庄嶋委員長：ちょっと話がそれますが、アンダー19は、たまたま今回はないのですが、そもそも「チームよつてら」はアンダー19ではありません。アンダー19は5万円までの補助金です。

事務局(齋藤主査補)：制度上、代表は大人がやっても大丈夫です。いわゆる19歳以下の人達を中心になって、5万円なら5万円をどう使っていくか、というところを工夫して頂くというところなので、書類は極端な話、大人が書いても問題ないです。

金子委員：そういう意味ではアンダー19は別にして、「チームよつてら」もそういう問題を抱えているのであれば財団の方で業者を調べて書類や代表について何かやってもらうのもいいのでは。

庄嶋委員長：そういった課題など、過去から継続の課題も少しあったということがありま

したので、そういうところを共有してもらいながら実際の今回の審査に臨んで頂ければと思います。時間も2時間以上たっていますので、議題としてはこれで終わらせて頂こうかと思えます。

#### 4 その他

事務局(齋藤主査補)：来月の確認をさせていただきます。開催通知はお渡ししてありますが、改めて。「第3回みんなで地域づくり推進委員会」につきましては、2月23日の9時40分から文化センター3階の301号室で開催予定です。何かのご事情でご欠席されるような場合はご連絡ください。当日は13団体の審査を行ないまして、その日のうちに委員会としての選考結果を公表する事となっておりますので、長時間のお付き合いをして頂くことになってしまいますが、よろしく願いいたします。以上です。

事務局(岩林課長)：最後の課題で、これからどういう風に事業を存続させていくか、というのも結構大きな問題として出てきています。私も後から入ったので、見聞きしていると、今はいいけれど今後どうしていくのか、今は基金があるのでそれでやっていますけれど、じゃあそれが尽きた時にどうするのか、これから将来にむけていろいろ検討するところあると思いますので、またご協力頂ければなと思います。

それでは、以上を持ちまして、第2回を終了したいと思います。長い時間ありがとうございました。

以上。